
太陽の女神と月の雫

神代家家長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の女神と月の雫

【Nコード】

N7803H

【作者名】

神代家家長

【あらすじ】

法術師。それは自然界の力を取り出して使役する事で成り立つ超自然的な能力者。光の法術師となった主人公は嫌々ながらも、その法術を受け入れ、やがて禁忌の力を手に入れる。

第一章（前書き）

新作、やっと第一章を載せる決意が出来ました。正直第一章は少し前から完成していたのですがタイトルが決まらず時間が掛かってしまいました。

第一章

火、水、土、風の4つの系統から構成される大自然の力を借りた術式。無から有を生み出す魔術とは似て非なる力。魔力を燃焼、消費する事によって事象を発現させる魔術とは違い元からある元素——例えば燃えている火を取り出して、それを自在に操る事。その総称を法術と言う。

言い換えるのならば法術とは手ぶらでは使う事が出来ず、火なら火、水なら水、土なら土、風なら風を所持していないと使用出来ない術。無論、水や土なら普通に持ち運べるが火や風を持ち運ぶ事は困難になる。普通ならば。

その持ち運び困難な火や風を術で固定化して持ち運び可能にする事。それもまた法術の一環であり、それを可能とする者を一般的に法術師と言う。

その法術師見習い。僕の名前はアルフレッド・ディア・ヴァルハリア。それなりに長い名前なので知り合いにはよくアルと略されて呼ばれている。

その僕は現在、法術師見習いが法術師になる為の最終過程である系統別の術式を判定する為の試験に挑んでいた。

系統——基本的に火、水、土、風の4系統なのだが、その中でも自分にもっとも適した系統を調べる為の試験。必ずしも、この試験で出た結果以外の系統を学ぶ事が不可能な訳ではないが基本的にここ——つまり法術師学院で学ぶ生徒達は自分の適した系統を選ぶ傾向が高い。高いと言うよりも選ばされる。強制的に。

というのも、この学院に入学する際、余りお金の無かった生徒達はある制約書にサインをする事で入学を許されているからだ。その制約というのが今回の試験で出た結果に従うという物で、言うまでも無くお金の無かった僕はその誓約書にサインをして入学している

訳で——ここで出た結果は絶対という訳だ。

まあ僕としては4系統の内、どれが適していても特に問題はないが強いと言うならば土系統ならば非常に喜ばしい。先にも述べたとおり法術と言うのは使用する系統の媒体を所持していなくてはいけない訳で、その意味で土ならば何処に居ても足元を掘り返すだけで確保出来る。その意味で土系統は非常に優秀な系統と言つてよかつた。

次に優秀なのが風。風は何処にでも吹いているからだが万能性という面で言えば土には及ばない。風がやんでいる時の風の法術師は無力なのだ。

その次が水。最後が火になる。

結局の所、法術師にとって重要なのは各系統の触媒を如何に効率よく持ち運べるかが課題になってくる訳で、その意味で土は非常に人気が高い系統だった。

もつとも法術学院に入学して2年。その間に学んだ法術の基礎知識から考えれば4系統であればどの系統であつても上手く使いこなせる自信があつた。僕は法術師見習いとして将来を期待された有望な生徒だった。

そう。4系統であれば。

「・・・え？」

試験の結果を耳にして僕がまず行つた事は『耳を疑う』という事だった。

「あの。もう一度言つて貰えますか？僕はどの系統で・・・」

「光だ」

「・・・え？」

もう一度言つて貰つたにも拘らず結局もう一度僕は我が耳を疑つた。

「ちょっと待つてください。だって、そんな光だなんて、そんな事言われても・・・」

「なんとわれようと君の適正系統は『光』だ。そして入学時の制約によつて君はこれから光の法術を学んでもらわなければならん」

「待つてください！もう一回。もう一回調べてください！」

光なんて冗談じゃない。本来、法術の系統は火、水、土、風の4系統に加えて光を入れた5系統なのだが普段、法術といえば4系統で現される。

理由で言えば二つあり、一つは光の系統が伝説と言われるくらい希少である事。多くの法術師を排出してきた、この学園ですら光の法術師なんて前例がない。何千人、下手すると何万人に一人出るかどうかと言う確率の系統だからだ。

そして、もう一つの理由は光の系統が途轍もなく『使えない系統』だからだ。

考えてもみて欲しい。一言に光といえば聞こえは良いが出来る事など高が知れている。灯りを灯すとか目眩ましに使うとか、その程度だ。灯りが欲しいならランプで十分だ！

「お願いします！もう一度、もう一度だけで良いですから！」

だから僕は必死に教官に頼み込んで再試験を懇願した。僕の懇願は嘆息した試験官に受け入れられ、そして――。

「・・・」

僕は光の法術師になった。

「では、これより光の系統試験を開始する」

結局、光の系統を覆す事が出来ず泣く泣く光を受け入れてから2週間後。僕は独学で光系統の法術を学び（学院にだって光系統を習得した人が居ない為）本来なら1年掛けて学ぶ系統別の試験に挑戦する事になった。

「では第一試験。光を集めて球体を作ってみなさい」

「・・・はい」

僕は言われたとおりに周囲の光（昼間なので何処にでもある）を集め、掌に光の球体を作り上げてみた。

「ん。合格だ」

「・・・」

物凄く簡単で単純で、光の法術師的に言ってみればマッチを使って火をつけるくらい簡単な事なのだが試験管は大きく頷いて合格を告げる。

この試験が非常に簡単で試験官も簡単に合格をくれる理由も簡単で、この試験官も光の系統の事を良く分かっていないからだ。彼は他の4系統の試験官であり本来は光の系統とは無縁なのだが光系統の試験官が居ない為に臨時に試験官として選ばれた人だった。

「では第二試験。今作り上げた光を私の元へ操作して一周させてから手元に戻してみなさい」

「・・・はい」

僕はまたも言われたとおり掌の光の球体を操作して試験官へと向かわせ、その周りを一周させてから掌へと戻す。

「ん。合格」

「・・・」

「次、第三試験は今ある光を10個作ってみなさい」

「・・・はい」

気負いも何も無く僕は言われたとおり今掌にある光の球体を同じ物を10個作り上げた。一つ一つなんてせこい事はせず10個いっぺんに作り上げる。

「素晴らしい」

「・・・」

元々光なんて質量は高が知れているし他の系統のように圧縮する度に難易度が上がると言う事もない。水や土なんて圧縮しようと思つたら物凄い労力が必要になるし火や風だった操作を誤れば爆発的な衝撃が漏れ出す危険性がある。

しかし光はどれだけ集めようと所詮は光なのだ。多少光量がます

が難易度なんてあつてないし等しい。

「では最終試験です。今ある光を使って何か適当な物を形作ってみなさい。そうですね、私そっくりの形を作るとかが良いかもしれませんが」

「・・・やってみます」

と言いつつ僕は集めた光を使って目の前に試験官そっくりの形の光を作り上げた。

「おお。これは凄い。文句なしに合格です」

「・・・どうも」

はつきり言つてちつとも嬉しくなかった。

本来一年掛けて習得する道のりを僅か二週間で終えた僕はいつでも学園を卒業出来る立場にあつたのだが既に一年分の学費を納めた後だった為に暫く学院の寮に居座る事にした。

それはそれとして僕は故郷に居る姉、僕の法術師学園に入学する際に学費を援助してくれた姉さんに報告の手紙を書き――ぐしゃぐしゃに丸めてゴミ箱に投げ捨てた。

「姉さんになんて言えば良いんだよ」

無事に法術師学院を卒業出来ました。でも何の役にも立たない光系統でした。ごめんなさい。

「阿呆か！」

僕は机に拳を叩きつけ、がっくりと肩を落とした。

結果として僕は直接実家へと赴き、姉さんに謝罪する事にした。

学院でする事も無く時間が有り余っていたといつても良い。

「ごめんなさい」

ある意味潔い僕の謝罪に姉さんは――。

「伝説の系統なんて凄いじゃない。全然謝る事ではないわ、アル」

「でも」

「しかも貴方は本来なら一年掛けて学ぶ過程を僅か2週間で踏破したのでしょうか？それは誇るべき物であって恥じるべきでも、まして謝るべき事でもないわ」

「うん。でも、ごめん」

優しすぎる姉は僕を一言も責めなかった。昔から僕に対して過保護な人だったけど今は正直、何か苦言を言ってくれた方が気が楽だった。

「そんなに落ち込まないで。折角伝説の系統に選ばれたのだから、それで何が出来るかを前向きに考えてみれば良いじゃない」

「でも、光に出来る事なんて高が知れて・・・」

「こら。最初から諦めちゃ駄目よ。いつも言っているでしょう？」

「・・・うん」

姉さんに窘められて僕は恥ずかしながら少しやる気を取り戻した。これだからシスコンとか言われるのだが――呼びたきゃ勝手に呼べ！

学園に戻った僕は早速、光系統に出来る事を考えてみた。

「・・・」

と言っても本当に光に出来る事なんて高が知れているので僕はランプを作る事にした。要するに照らす事しか出来ないなら照らす道具を作る事にした訳だ。

「えーっと」

まずは材料を買い求め、ランプの形を作った後は昼間集めた光を収めて出来上がり。

「簡単過ぎる」

一応、法術師の集めた系統法術は集めた本人にしか扱う事が出来ないのでランプにそれなりの工夫を施す事になったのだが予想以上に簡単に作業が終わってしまった。

「良い出来、なんだけど」

やっぱりなんだか物足りない。言い換えると苦勞のし甲斐がない。

「まあ、いつか」

同じようにランプを幾つか作ると折角だから同じ寮の生徒達に売り歩く事にした。

「ちよつと高くないか？」

僕の提示した値段に寮生は少しばかり不満を漏らす。

「初回は材料費なんかも加算されるからそう感じるかもただ次からは今の半額以下で構わないよ。さっき計算してみたけどランプの油代より安く設定しているから」

「ほお。この光、どのくらい持つんだ？」

「30日に設定してある」

「一ヶ月か。それでこの光が消えたらお前がまたこのランプに光を入れてくれるって訳か。良い商売を思いついたな」

「もう一度言うが今使っているランプ代より安いし、便利だぞ」

「まあ、同期のよしみで買ってやるか」

「毎度」

とりあえず他の寮生達にも売り捌く事には成功した。

寮生達には悪いが実験としてサンプルになった甲斐があつてランプは思いの外、好評だった。ランプの油代との比較もそうだが従来のランプと比べて光量が段違いなので夜中でも字が読める、勉強もしやすいなど概ね好意的な反応だった。

「でも、これってもうちよつと工夫出来ないのか？」

「何が？」

「明るいのが良いんだが明る過ぎる。夜中に毛布を被せているんだが、そこからも少し光が漏れてきてな。少し寝にくい」

「そつか。そう言えばそうだな」

僕の集めた光は30日持続するが逆に言えば30日間ずっと明るいままだ。照らすのには良くても睡眠時には余り良い傾向ではない。「ふむ。すつぽり被せられる蓋でも用意するかな」

「それだといちいち面倒じゃないか？なくしたりもするかもだし」
「む」

寮生の意見を受けちよつと工夫してみる事にした。

「これでどうだ？」

僕が提示したのは蓋を開封式にした物だった。これならなくす心配もないし蓋を開ける度合いで光量も調整出来る。

「お前、意外に器用だな」

「まあ、な」

日中ずつと暇だから、とは流石に言わなかった。

寮生達の反応が上々だったので町で売る事にした。

学院から一時間ほど歩いた所にある城下町。そこで僕は露天のように地べたに商品を並べて売る事にした。

無論、初めから売れるなんて期待していなかったので暇つぶしの本やランプの材料を持ってきたので特にもてあます事は無かった。

「これは何を売っているんだい？」

状況が変化したのは店を広げて1時間ほどもした頃だろうか。尋ねられた声に顔を上げると主婦らしき女性が俺の並べたランプを物珍しそうに眺めていた。

「見ての通りランプだよ」

「その割には油を入れる所もないし、取っ手も付いてないじゃないか」

「火を使わないランプだからな」

僕は見本にと今まで空になっていたランプのガラス部分を開いてから周囲から光を集め、その中へと収めガラスを閉じる。

「ご覧の通り純粋な光を入れるから油は要らないし、火を使つてな

いから火傷の心配も無い」

「へえ。面白いねえ。あんた法術師かい？」

「ああ。何の因果か光系統の法術師だよ。お陰でこんな事くらいしか出来やしない」

俺が肩を竦めると主婦が笑う。僕としては本気で笑い事ではないのだが。

「気に入ったけど、買うならもう少し見せて貰おうかね」

「どうぞ」

主婦は僕が光を入れたランプを物珍しそうに眺めていたが、やがて僕がやったようにガラスを開けて光を外に出してしまった。

「と。とと？」

その光を慌てて捕まえようとする物の光は光。術者である僕以外では掴む事も触れる事も出来ない。

「ど、どうするんだい、これ？」

「ランプの設置部分に法印が刻まれているから、そこに載せれば固定出来るよ」

「こう？」

ガラスの除いたランプを光に近づけると光が固定化されて落下を止める。それを確認してから主婦はガラスを被せた。

「焦ったねえ。これ下まで落ちたらどうなるんだい？」

「普通に地面に吸い込まれて終わりだな」

太陽の光を集めた以上、熱が全くないと言う訳ではないが人の体温より下程度の熱しか持っていない。この光で火事になるなんて事はありえない。

「それじゃ誤って地面に落としまつたら買いなおしかい？それは不便だねえ」

「光の質量なんて高が知れている。綿より軽いから・・・」

僕は主婦から受け取ったランプから光を取り出すと目線の高さで手を離す。しかし光はその場から殆ど動かずに固定されていた。

「よっぽど鈍くなければ地面に吸い込まれる前に捕まえられるよ。」

この高さからでも恐らく数時間は地面に向けて落下する筈だ」

「へへえ」

主婦は関心したように頷くとランプの値段を聞いてきた。僕がそれに答えると――。

「ちよつと高くないかい？」

寮生と同じような反応をしてきた。

「今使っているランプの油の代金を目安に考えているんだろ？初回こそこの値段だけど次からは半額以下で光を入れさせて貰うよ。後々を考えれば今使っているランプよりお得になる筈だ」

「ふゝん。まあ法外って程じゃないし面白いから一つ買ってみるかね」

「毎度」

僕は主婦に先程とは別に光を集めてランプに入れて渡した。

恐らく、それが契機だったのだろう。遠巻きに見ていた人々が今の主婦とのやり取りを見ていたようで徐々に僕のランプは売れるようになってきた。

リピーターを前提とした商売として、このランプは僕の予想以上に上手く出来ている事を知った。

なんと言つても最初に渡すちよつと高いランプの材料費以外は元手が掛からないのだから。客は光が消えたランプを僕のところへ持つてきて、そのランプに再び光を入れればおしまい。ひよつとしてこれはぼろい商売なのかもしれない。

街で商売を始めてから一ヶ月程が経った。

そろそろリピーターが来てもおかしくないと思い始めた矢先――。

「あゝ。居た居た」

見覚えのある――第一番目の客である主婦が僕の所へやってきた。

「入れ替え？」

「ああ。昨日切れちまって代わりに以前使っていたランプを引っ張り出してきたんだけど驚いちゃったよ」

「？」

「全然明るくなった気がしないんだよ。油を入れるのも面倒だし下手な所触って焼けどしまうし、散々だったよ」

「そ、それはご愁傷様？」

「まあ、兎に角、光を入れておくれ。金額は前の半額以下で良いんだったよね？」

「ああ」

僕が光を入れると主婦は笑顔で代金を払って去っていった。どうやら常連客になってくれるらしい。

それから何人か光の入れ替えを望む客が来て僕の懐は少し暖まってきた。この調子ならランプの初回金額をもう少し下げても良いかもしれないと思った。

更に一カ月後。ちょっとした問題が浮上した。

苦情が来たのである。いや、勿論客からではなく僕がランプを売る事によって一番被害を被った人からの苦情だった。

僕がランプを売る事で一番被害を被った人——町のランプ屋さんが『どうしてくれる』と怒鳴り込んできた訳だ。

別に無視しても良かったのだけど折角だから店を臨時休業にして城へランプの認可を取りに行く事にした。城から認可が下りれば文句は言えない筈だから。

城の受付に書類を提出し、いくばくかのお金を払うだけで認可はあっさりと落した。これで誰はばかる事無く商売が出来ると帰ろうとした時、受付のお姉さんが声を潜めて話しかけてきた。

「実は折り入って相談がありました」

「なんです？」

話を聞くとどうやら僕のランプの事がちょっと噂になっていたらしく、城の明かりを僕のランプに総換えしようという案が出ているらしかった。

正直、願ってもない事だった。

城の明かりとするランプの総数を考えればかなりのお金が入る筈だし、しかも一ヶ月ごとに僕に収入が出来る訳だ。断る理由なんて何処にも無かった。

これで姉さんに仕送りが出来る余裕が出来るかもしれない。

僕としては城の明かりを付け替える作業は大仕事になるかと思っていたのだが、城側としては外観を損ねない為に今使用しているランプの形をとどめたいという話だった。なので僕の作業はたったの二つ。今あるランプに法印を刻む事と光を収める事。たったそれだけなのである。楽な事この上なかった。

「何をしていますか？」

楽なのは良かったのだが思わぬ人に見つかって思わず光を入れる時に脚立から転げ落ちそうになった。

「？」

「あ。いえ、その。明かりの総入れ替えをしていました」

何とか体勢を持ち直してしどろもどろに答える。面識は無かったが彼女の事は流石に僕でも知っていた。

この国の第一皇女、リリエラ「エル」リトルカーナ様だ。

「ああ。そう言えばそういうお話も聞いていましたね。でも貴方お一人で？」

「ええ。まあ他に光の法術師なんて居ませんし」

言いながら僕は光を集めて法印の刻まれた場所においてガラスの容器を被せる。

「面白そうですね。それ、私のお部屋にも一ついただけます？」

「あゝ。それなら僕が作った方のランプをどうぞ」

僕は持ってきた鞆の中から普段売ってる方のランプを差し出す。

「おいしくかしら？」

「差し上げます。城の仕事を貰って随分儲けさせて貰いましたから」
「まあ」

王女様は意外に気さくにクスクスと笑い出す。今までよく見てい

なかつたけど結構可愛いかも。

第一章（後書き）

『太陽の女神と月の雫』は前作『反転・遊戯・リバーズ・ゲーム』とは直接的な関わりはありません。

けれど、この作品は『反転・遊戯・リバーズ・ゲーム』から派生した作品であり、ほんの少しですが影響を受けている作品です。

第二章

それに気付いたのは恐らく日差しのせいだと思う。

「あちい」

一応お金も入ったので幌を買って日差しを防いでいたのだが暑くて溜まらない。これだから夏は嫌いなのだ。

「これだけ良い日差しなんだからランプの日数が増えたりしないのかい？」

「僕のランプの光が30日しか持たないのは光を維持する日数の限界が30日だからであって光量が足りていない訳じゃないですよ」

まあ、この日差して光を集めれば普段より明るくなったりはするかも知だが。

「なんだ。こんなに暑い日ならちよつとはお得になるかと思つてきたのにねえ」

そう言いつつ僕に光の消えたランプを差し出すのはすっかり常連になった例の主婦だ。僕がそのランプに光を入れて主婦に返すと彼女は僕に代金と一緒に飲み物を渡してくれた。

「おまけさ」

「ありがたく頂きます」

はつきり言つてこの暑さの中では渡りに船だった。

「あちい」

主婦が去り、飲み物を飲みきつてしまうとまた暑さに湯だつて意識が朦朧としてくる。光を操作出来ると言つても自分に降りかかる日差し全部を何とか出来る訳じゃない。そもそも太陽の光なんだから次から次へと降り注いでくるので何とかするなら元をどうにかしなくてはならない。

「待てよ？」

太陽そのものをどうにかする事は出来ないが――。

「・・・」

僕は燦燦と振り注ぐ日差しの中に手を差し伸べ少しだけ光を集めて『その形』を作ってみた。

「なるほど」

確かに太陽そのものはどうにも出来ないが、こちらに向けられる光を屈折させる事は出来るようだった。光で凹凸のあるレンズを作る事によって。

今やって見たが虫眼鏡みたいに光を一点に集める為のレンズなら容易く作れそうだ。まあ、こんな物を作っても文字通り虫眼鏡くらいしか役に立たない――。

「確か望遠鏡なんかも同じようにレンズを組み合わせで作ってあるんだよね」

試しに街の外――丁度遠くに一本杉が立っているのが見えたので、その方向へと幾つかレンズを組み合わせてみる。

大きさ、凹凸、その他諸々の調整が必要だったが――見えた。

ここから数百メートル、下手すれば1キロ以上離れているにも拘らず僕にはレンズを通して一本杉に止まる鳥の様子や虫の様子が手に取るように『見えた』。

「あ」

それだけでなく、こちらを向いた鳥が驚いて羽ばたいていくのを見て気付いた。こちらからだけではなく向こうからも見えているらしい。

光系統の法術の特性の一つに射程距離が恐ろしく長いという物がある。光の速度で進む光を相手にする系統なのだから当たり前といえは当たり前なのだが、言い換えればこの星全てが僕にとっては射程距離内だ。というか月まで余裕で届く。

その意味で今のは僕の作ったレンズを一本杉の近くまで作り出していた為、あちらからも僕が見えてしまった訳だ。

そして僕が先ず思った事は――。

「このレンズで何処まで見えるんだろ？」
それだった。

障害物や星の丸みは屈折と言う一つの現象で全て賄えてしまった。僕が先ず試してみたのは自分の寮の部屋から実家——つまり姉さんの所まで届くかどうか。

結果だけを言えば余裕で届いた。

馬車で三日近く掛かる距離だというのに僕の作ったレンズはその距離を全く問題にせず姉さんの所まで届いてしまった。

僕のレンズを目の前にした姉さんは大層驚いていたが、僕が事情を説明すると（声まで届かないので必然的に筆談になる）ニツコリと頷いて『凄いのね』と書いてくれた。

それからは毎晩姉さんと筆談するのが日課になった
シスコンと言うなかれ。

紆余曲折があつたが結果として僕は光系統に対しての嫌悪感や拒否感は既に薄れて受け入れ始めていた。何より毎晩姉さんと筆談できる事が嬉しかった。

でも僕はこの時点で気付いていなかった。

何故光系統が『伝説』と言われているのかと言う事を。

気付いたのはお城に光の交換に行った日の事だ。

その日も普段どおり光を集めてランプの中へという単調な作業が続いていたのだが、最後に僕の光を気に入れてくれていたリリエラ皇女のところでお茶を頂く事になった。そのとき彼女の机の上に載っていた物が元凶となった。

「なんですか、それ？」

「これ？これはこの付近の地図ですよ」

「地図？」

皇女様に見せて貰うと確かにそれは地図のようだった。

「本当はもつと詳細な地図が欲しくて以前、風系統の法術師に頼んで上空から大陸を調べて貰ったのですが・・・」

「が？」

「二つの点で問題があつて」

「？」

「一つはその風系統の方には絵心が無かつた事」

「あゝ」

「そして、もう一つは法術で空を飛んでいる状態ではまともに絵など書けないと言つ事です」

「・・・」

最初に気づけよ、と思わずツツコミを入れそうになって慌てて思いとどまる。相手は皇女様だ。

「この地図も土系統の法術師の方に頼んで作つて貰ったのですが、やはり詳細な部分までは作れないらしくて」

「地図、か」

僕は窓際に立つて窓を開けると少しだけ頭の中でそのイメージを計算してみる。

「何とかなるかな」

そして例のレンズを上空に巨大に展開し大陸の全体図を壁に映し出した。

「これは・・・」

「光を屈折させて上空から見える大陸の状況を映し出してみたんですが・・・」

確かに映し出されているが何だかばやけていて詳細と言ふには程遠い。

「これじゃ役に立たないですかね」

「いえ！そんな事はありません！」

彼女は見開いていた目を僕に向けて大きな声で否定する。

「もう少しだけその状態を維持してください。今連れてきますから！」

「は？」

疑問を向ける僕を無視して彼女は部屋を大急ぎで出て行ってしまった。どうしようかと暫し迷ったが、そんな心配をする間に彼女は数人の人間を連れて直ぐに戻ってきてくれた。

「えっと。何を？」

「この光景を書き写します」

「じゃあ、この人達は絵師？」

「唯の兵士です。さあ、早く書き写してください。壁に直接書き込んでも構いません」

「畏まりました」

数人の兵士達は皇女様に言われたとおりテキパキと壁に映された物を上からなぞる様にして壁に書き込んでいく。

「良いんですか？こんな事して」

「些細な事です。これほど詳細な地図と引き換えなら壁の一枚や二枚安い物です」

「は、はあ」

そして瞬く間に輪郭を書き写し、次に街などを既存の地図を参考に書き写して名前も書き込まれていく。なるほど、こうやれば僕のボンヤリした光景でもしつかりした地図になる訳か。

僕は皇女様の行動力に感心しながら日が傾いてずれそうになる光景を随時調整して——気付いてしまった。

「あ」

とんでもない事に気付いてしまった。

「疲れましたか？」

僕の動揺から僅かにぶれた光景に皇女様が気遣ってくれるが、そんな事はどうでも良い事だった。

「いえ。大丈夫、です」

それから地図が出来上がるまで僕の緊張は続いた。

学院への帰り道。僕は当惑と困惑に苛まされていた。

「どうしよう」

いや、どうしようもないし、どうもしなくて良いのだけど――。

「気付かなければ良かった」

一度気付いてしまった事は取り返しが付かなかった。

「でも・・・」

そう。でも、これは光系統の法術師として僕が考えなければいけない事だった。

数日後。

姉さんにも相談出来ない事だったが結論として僕はこの事実を可能な限り隠す事にした。そうする事が一番良い事だと思ったからだ。人間とは不思議な物で、そう決めるとなんだか気が楽になった。

そう決めて僕は学院からいつも通り街へ行く道と通り、丁度学院と街の中心にある一本杉の辺りまで来たとき奇妙な連中に遭遇した。「こんにちは。アルフレッド君」

彼らは夏場だと言うのに頭からすっぽりフードを被った七人組。

「えっと。どちら様？」

「そう警戒しないでくれたまえ」

彼らのうちの一人がフードを下ろして素顔を見せる。フードの下から現れたのは中年の男性だった。体格から見ると筋肉質のおっちゃんといったイメージだ。

「我々は君の同士だ」

「同士？」

「そう。見たまえ」

彼は右手を僕に差し出すと、その手に光が集まっていき一つの球体を作り上げる。

「光系統の法術師？」

「そついう事だ。我々が君の仲間だと理解してくれたかな？」

「あんたらが全部光系統の法術師、なのか？」

「その通りだよ。アルフレッド君」

「・・・」

彼の言葉を信じるならば、この場に僕以外に七人もの光系統の法術師がそろった事になる。

「七人も・・・」

「違うぞ、アルフレッド君。七人『も』じゃない。七人『しか』居ないのだよ」

「？」

「他の系統の法術師ははいて捨てるほど居るというのに我々は七人君を入れても世界中でたったの八人しかいない」

なんとなく、その言葉に他系統の法術師に対する憤りを感じた。

「そ、それでその光の法術師一行様が僕に何の御用で？」

「無論、君を迎えに来たのだよ。アルフレッド君」

「な、何で？」

「アルフレッド君。君は今の生活に満足しているかね？」

「え？」

唐突に振られた話題に僕は戸惑う。

「光系統と言うだけで法術師と見られず日々の生活さえまならない。違うかな？」

「ぼ、僕はちゃんと生活しています」

「ほお。どうやって？」

「ラ、ランプを作ったんです。これ」

僕は鞆の中からランプを取り出して見せる。

「街で売ったら結構好評で、噂を聞きつけた城の人達が僕のランプを気に入ってくれて毎月交換に行っているからお金はそれなりに・・・」

「」

「なるほど。君は頭が良いな」

僕の説明を遮ってパチパチと拍手をするが、なんとなく好意的じゃない印象を持たれた気がする。

「しかし君は法術師だ。そのランプだけで君自身が危機に陥った時、自衛の手段はあるのかね？」

「な、何でそんな事を・・・」

「我々の同士になるのなら君にその為の自衛の手段、光系統の最終奥義を教えてあげようと思ってね」

「！」

自覚はしても自分の目が驚愕に見開かれるのを止める事が出来なかった。まさか、こいつら――。

「興味はあるようだね」

「べ、別に・・・」

今更遅いが視線を逸らして小声で否定する。

「遠慮する事はない。君には知る資格があるのだから！」

そう言つて彼は身体を覆っていた外套の中から手を出してもつていて『それ』を僕の眼前に突き出した。

「光の・・・塊？」

「見ていたまえ」

それを僕の前で握りつぶすように握ると、その光の塊は形を変えていく。その形は――。

「光の剣？」

「そう！これこそ我々の持つ光系統の最終奥義。方法はまだ秘密だが、君にも同じ物を作る資格あるのだよ！」

「・・・」

僕はそれを見て、聞いて――。

「はあ」

安堵と同時に気が抜けた。

「はつきり結論から言わせて貰いますが・・・」

「うん？」

「お断りします。あんた達みたいな変な集団の仲間だなんて思われるのは御免だ」

「なんだと？」

「仕事があるので、これで失礼します」

僕は連中の横を通り過ぎて街への道を急ぎ歩き出し――。

「待てい！」

その大きな身体を割り込まれて行く手を塞がれる。

「何故だ！この光の剣が欲しくはないのか？」

「そんなチンケな剣、いらないよ」

「何？」

そもそもの話、僕は剣士でもなんでもないのでから剣を作ったって何の意味もないし、それ以前に剣が欲しいなら普通に武器屋で買えば良いのだ。

「そろそろ店を出さなくちゃいけないんだ。どいてくれ」

「黙れ！人が優しく諭してやれば付け上がりおって！」

「な！」

彼は行き成り人が変わったように顔を真っ赤にして怒鳴ると僕に向けて例の光の剣を突きつけてきた。

「大人しく仲間になれ。さもなければ……この場で斬り捨てる！」

「何だ、それ！脅迫じゃないか！」

「黙れといった筈だ！貴様に選択する権利など必要ない！」

「……」

ぎゅつと唇を噛み締める。

「そっちの奴らも同じ意見なのか？」

僕は目の前の男以外の六人に視線を向ける。

「手荒な事はしたくないけれど、剣を見られた相手を何の制約もなく解放する訳には行かないわ」

「勝手に見せておいて……」

「断られるとは思っていなかったのよ。光の法術師にとって光の剣は喉から手が出るほど欲しい術の筈だから」

「……」

確かに気付かなければ少しは興味を示したかもしれない。だが今更そんな物持つて来られても迷惑なだけだ。

「じゃあ、どうしても僕を連れて行くというんだな」

「彼も言っていたけれど貴方に選択肢はないわ」

「・・・」

再度ぎゅつと唇を噛み締める。使いたくない。けれど、こんな奴らと一緒にいくなんて御免だ。よりによって7人もの光の法術師と！

「分かった。覚悟を決めよう」

「そう。それじゃ・・・」

「お前らは・・・死ね」

一番に狙ったのは話をしていた中年の男だった。理由をあげればいい加減腹も立っていたし狙いやすかったからだ。

「！」

今まで男の居た場所に唐突に大穴が空き、近くに居た六人が声も無く吹き飛ばされて転がる。

「何？何が起ったの？」

二番目に話していた女のフードが取れて素顔が見えていたが僕は歯を食いしばって連中を睨み付けるのが精一杯だった。

「アルバ。アルバは何処へ行ったの？」

「さっきの男ならもう居ない。蒸発してこの世から消滅した」

「な、何を言って」

「『アマテラス』。それが僕の考案した光の法術の最終奥義だ」

気付いたのは皇女様の部屋の壁に大陸の様子を投影している最中だった。大陸をカバーできるほど大きなレンズを形成出来るなら、太陽光を一点に集中する事も出来るのではないかと。

その結果が今の威力だ。男の頭上から照射された太陽光——アマテラスは男を骨一本残さず蒸発させた。大地にも深い穴を空け、余りの熱量に大地が爆発した。

「小僧が！調子に乗るな！」

話していた三人が激昂して光の剣をその手に持ち、僕に向かって

くる。僕は一度だけ強く目を瞑ってから——三人に対して薙ぎ払うように照射した。

「ぎあ！」

二人はアマテラスが直撃して蒸発し、残る一人は直撃はしなかったとは言え台地の爆発に巻き込まれて粉々になって吹き飛んだ。

「・・・残り三人」

「引け！」

残りに視線を向けると不利を感じ取ったのか無様に背中を見せて逃げていく所だった。

「・・・はあ」

それを見て僕は深く息を吐き出した。

気乗りしないがサボる訳にも行かないので仕事を終えた夜。

学院への帰り道、今朝と同じ場所で——今朝逃げた三人が待ち伏せていた。

「尻尾を巻いて逃げたんじゃなかったのか？」

「朝の術。アマテラスとか言っただな」

答えたのは若い男。

「それが？」

「あの威力から考えて、あの光は太陽の光を集束させたものだ。大した威力だと言わざるを得ないが弱点も明確だ」

「・・・良い月だな」

僕は男の言葉を見無視するように視線を上に向けて月を指し示す。

「月の光を集めても今朝のような威力は出せまい。太陽が見えない今、あの術は使えない」

「お前、本当に光系統の法術師なのか？」

「何？」

僕は正直本当に呆れていた。

「月が見える。月の明かりつてのは太陽の光が反射した物だ。なら月が見えると言う事は・・・」

「！」

驚愕し、男の目が見開かれる。

「くー！」

焦った男は僕に光の剣で斬りかかろうとするが——遅い。既に準備は完了している。

「ぐあー！」

男の背後から照射されたアマテラスが男の足を貫いて蒸発させる。

「少しずれたか」

「あが！がふ！ごばー！！」

もう一発撃とうとしたが撃つまでもなく男の体がぶくぶくと泡立つと大きく膨れ上がってボン！と破裂した。

なるほど。アマテラスの熱量ならかすっただけでこうなる訳か。

「嘘。夜なのに、太陽なんて見えないのに、どうしてアマテラスを・

・・」

残った二人は若い女と皺だらけの老人。

「太陽が見えなくても太陽が消えた訳ではない。なら太陽のある所から光を持って来れば良いだけの話だ」

「そ、そんな事・・・」

「時間と太陽の軌道が分かれば計算は容易い。アマテラスに死角はない」

「！」

話していた少女の顔が恐怖に歪む。

本当は上からの直接照射に比べて横からの屈折照射は湿気などの影響で歪みが出る為、狙いが難しい。さっきずれたのもその為だ。

「一つ頼みがある」

狙いを調整していると老人の方から話し掛けられた。

「我々の結末がどうあれ、この子だけは見逃しては貰えまいか」

「そ、そんな！」

老人の提案に少女の方は異を唱える。

「この子が我等の傘下に加わってまだ一年に満たない。この子は君

の脅威にはなるまい。だから、この子だけは見逃して欲しい」

「・・・」

「もつとも私も負ける気はないがね」

そして老人は光の剣を両手で持ち——剣の形を崩して球体へと戻す。

「行くぞ。若造！」

そして、突っ込んでいった。僕に向けて突っ込んで行って両手で持った球体を僕に押し付けるようにして——。

「な!？」

押し付けた両手がすり抜けた事に驚愕して——。

「ごば！」

爆発した。

「自爆か」

「え？」

少女の背後に居た僕は結末を見て眩く。

「ど、どうして？」

「あからさまに何かをしようとしているのに何もせずただ単に突っ立っているとは思ったのか？」

「あ。光で・・・」

「そう。幻影を作って一番安全な所に退避していた」

あの老人に対して一番安全な場所——少女の後ろに。

「酷い。酷いよ！」

「お前達がそれを言うのか？」

「・・・」

少女は沈黙し——さめざめと泣き出した。

第二章（後書き）

この章に登場する必殺技『アマテラス』は本来『反転・遊戯・リバース・ゲーム』に登場するテンペスト用に考案した能力技でした。能力者至上、最大の攻撃力を持つ能力という事で考案した訳なのですが――色々とテンペストとは相性が悪いので他の作品として纏め上げる事にした次第です。

第三章

「なあ」

「・・・何？」

僕はいつも通り商品を広げて商売をしていたのだが、ついに我慢出来なくなつて問いかけていた。

「お前、何で居る訳？」

「悪いの？」

「あの爺さんとの約束は結果はどうあれお前に危害は加えないでくれと言うものだった。けど、お前さんの面倒まで見ろとは言われていないぞ」

何を隠そう僕の隣には先日襲撃してきた七人の光法術使いの最後の生き残りである少女が居たのだ。

「だって行く所ないし」

「家は？」

「あの人達と同行する時に捨ててきた」

「家族は？」

「そんなの最初から居ない」

「お金は？」

「あんまり持っていない」

「・・・」

「・・・」

どうしろと言うのだ、僕に。

「じゃあ、あれだ。バイトとして雇うから」

「バイト？」

「使えるんだろ？光法術」

「うん。一応は」

「なら、このランプの光を集めてくれ」

「良いけど・・・」

少女は何故か不安げに僕を見上げて――。

「維持期間は？」

「とりあえず30日を目安に」

「私の光法術じゃそんなに維持出来ない」

「・・・」

「長くて二週間くらい」

「・・・」

「何か言つてよ！」

「役立たず」

「・・・」

少女は泣きそうになって――結局、膝を抱えて泣きだした。

とりあえず彼女――ティア・アムズ・マルレシアに出来る仕事
と言う事で休憩時の店番を頼む事にした。もともと店先には休憩中
という看板を立てているし彼女が代わりに光を集める訳ではないの
で良く言つて万引き避け位にしかなくていい。

「そんなに今までどうやって生活してきたんだ？」

「わかんない」

「？」

「今まではあの人達が面倒見てくれていたから」

「その前は？」

「里親の人が法術学院に通わせてくれてたけど私が光系統だつてわ
かったら・・・」

「放り出されたのか？」

「・・・」

また膝を抱えて顔を埋めてしまつ。どうしても良いけど泣きすぎ。

「そんなん僕が放り出したらどうするつもりなんだ？」

「・・・わかんない」

計画性も自立心も有能性もないとなると、もうどうしようもない。

「僕の事、恨んでない訳？」

根本的な話、仲間を皆殺しにされた訳だから僕に対して複雑な心境であつてもおかしくない筈なのだが――。

「わかんない」

「・・・」

どうにも扱いに困る子だった。あの老人が最後に見逃してくれと
いった気持ちが少し分かった気がした。

「ところで今何処に住んでるの？」

今朝、ここに来たときには既に彼女はこの場所を陣取って居た。

だから昨日彼女が何処に泊まったかまでは知らなかった。

「ここ」

「は？」

「だから、昨日はここで寝た」

「・・・」

聞かなきゃ良かった。

「良く風邪を引かなかつたな」

「・・・慣れてるから」

「・・・」

不覚にもちよつとだけ涙が出そうになった。

「一応言っておくけど僕だって裕福な訳じゃないからな。姉さんの
所に仕送りもしてるし」

「お姉さん、居るんだ」

余計な情報を与えたかと思つたが、どうやらこちらをどうこう
しようと言う訳ではなく単純に羨ましいらしい。

「それは兎も角、ホームレスは不味いよな、ホームレスは」

「貴方は何処に住んでいるの？」

「僕？僕は法術学院の寮だけ」

「まだ学生だったの？」

「法術試験はとくにクリアしているけど学費は振り込み済みだから卒業せずに住み込んでいるだけ。来年になったら適当な住居を探

すつもりだった」

「そうなんだ」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「とりあえず・・・不動産屋行くか」

認めたくないが根負けした。

「狭いね」

「我がまま言える立場か。言っておくけど貸すだけだからな。ちゃんと働いて返して貰うぞ」

「なけなし——と言うほど余裕がない訳ではないが手痛い出費をして彼女の住居を確保した。」

「それじゃ僕は仕事に戻るけど・・・」

「分かってる。ちゃんと働く」

「一抹の不安を覚えながらも僕は仕事の場所へ戻り——」。

「なあ？」

「・・・何？」

「ちよつとした既視感を覚えながらも一応聞いてみた。」

「お前、何で居る訳？」

「悪いの？」

「仕事を探しに行くんじゃないの？」

「だから、仕事場」

「そう言ってこの場を指差す彼女——ティア。」

「・・・」

「なんだか一気に脱力して言い返す氣力を無くした。」

「ところでさ・・・」

「ん？」

「緩慢な客の相手をしながら帳簿を団扇代わりに扇いで涼を取って

いると不意にティアが話しかけてきた。

「アマテラスってどうやるの？」

「何でそんな事を聞く？」

「・・・」

「どんな理由でも構わないが、僕はあれを人に教えるつもりはない」

「代わりに光の剣の作り方、教えてあげる」

「大体予想がつくからいらない」

「・・・」

「こうだろ？」

僕は実際に光を集め始める。

「定期的にこうして光を集め続ければいつか質量を持つ光を形成する事が出来る。それを剣の形に整えれば出来上がりだ。あの爺さんが最後に自爆した手法は光の剣を維持していた結合を解いたんだろ？それで集約されていた光が開放されて爆発した。違うか？」

「わかんない」

「そう」

どうやら光の剣の精製法は知っていても爺さんがどうやって自爆したかは知らなかったらしい。

「そう言えばお前も光の剣、持ってるのか？」

「・・・」

ティアは無言で懷から光の塊を取りだす。しかし他の奴らの物に比べて光の密度が薄い気がした。

「私、まだ物質化出来るほどには光を集めてないから。物質化するまで後数年は掛かるみたい」

「ひょっとしてアマテラスを欲した理由はそれ？」

「うん。アマテラスの光量なら一気に物質化出来るくらい光を集められると思って」

「やめておきな」

「なんで？」

「アマテラスの光量は確かに数秒で物質化するほどの光を集められ

るだろうけど、その分熱量も半端じゃない。人一人を一瞬で蒸発させる熱量があるんだ。そんな物を集めたらどうなるかわかるだろ？」年月を掛けて光を集めるからこそ熱を冷ましながら光を蓄える事が出来る。

「でも、それじゃ本当に私ただの役立たずだよ！」

「・・・」

「何でも良いの！私にも出来る事が欲しいの！」

「・・・はあ」

僕は日光を遮る為の幌から手を出して降り注ぐ日光を屈折させて一点集中する虫眼鏡を作る。

「これ、出来る？」

「え？えっと」

ティアは見様見真似で僕と同じように幌から手を出すと試行錯誤し始める。

「あ。出来た」

試行錯誤を開始して5分以上の時間を掛けて虫眼鏡を作り出す。

「ひよっとして、これをどんどん大きくして、どんどん上に上げていくのがアマテラスなの？」

「実際はもつと複雑だけど基本はそうだよ」

「思ったより簡単そう」

「じゃあ、やってみれば？」

「え？」

僕の言葉にティアは周囲を見渡して戸惑う。この場所でアマテラスなど使ったら被害が甚大な物になると思っっているのだろう。

「やってみればわかるよ」

「う、うん」

それでも僕の言葉を受けてアマテラスを形成し始める。が――。

「あれ？」

当然、上手く行かない。

「どうして？」

「位置が低い。範囲が狭い。角度が甘い。それに形成するレンズが一つじゃ駄目だ」

「????」

「アマテラスに必殺の熱量を求めるなら大陸を覆うほど巨大なレンズを作らないと駄目だ。その為にはかなり上空にレンズを作らないといけないし、照射を絞るなら複数のレンズを同時に形成しないといけない。その上、太陽の位置を常に計算に入れておかないと下手すると自分にアマテラスを照射して自爆する事になる」

「え?え?え?」

一つ目のレンズで集めた光を受け皿となるレンズで直線に伸ばし、次のレンズへと送る。そうして最終的には髪の毛ほどの細さの光に調整する。それが出来てこそそのアマテラスだ。その膨大な熱量は本来ならレンズなど一瞬で蒸発させるほどだが光で作りに出したレンズなら熱量とは関係なしで形を維持する事が出来る。

「分かった?」

「わかんない」

「だと思った」

僕はさっきと同じような幌から手を出すと、今度はミニチュア版のアマテラスを作ってみせる。少し高めの位置に置いた掌に形成されたレンズは光を少し下に集め、その光が下のレンズに吸い込まれて細い線になって地面に照射される。

「あ。なるほど」

ほんと手を打ってからティアは再びアマテラスの形成を始めるが

——当然、上手く行かない。

「どうして?」

「レンズの形成が甘い。太陽の位置の把握も甘い。常に太陽の位置を把握しておかないと少しでも位置がずれたら本当に自爆するぞ」

「うゝん。うゝん」

「しかも、この形成を一瞬で出来るようにならないとアマテラスは使いこなせない」

「え？」

「考えてみれば分かるだろう？ずっと照射の形を維持したら延々と光が照射されてしまう。使わない時は平面のレンズにして待機状態にしておく必要があるんだ」

「うゝ。面倒くさい」

「もしアマテラスのレンズの形成だけしか出来ないようなら、僕はアマテラスでお前を殺す」

「！」

「良く憶えておくと良い。アマテラスは世界を滅ぼす光なんだって事を」

「せ、世界って」

「出来ないと思う？アマテラスの照射時間が10秒もあればこの国なんて滅ぼせるんだぞ。しかも射程距離はこの星全てだ。世界を滅ぼすなんて10分掛からないさ」

もつとも、こんな熱量の照射を続けたら大気の方が先にどうかな
ると思うけど。どちらにしろアマテラスに掛かれば世界を滅ぼすな
んて朝飯前だ。

「それでもお前はアマテラスを覚えたいのか？」

「・・・」

ティアは暫くは沈黙していたが、やがてコクリと頷いた。

「私は役立たずじゃない。役立たずで居るくらいなら死んだ方がマシ」

「・・・」

とりあえず、もつと簡単な所から教えていく事にした。

第四章

某月某日。

ちよつとした実験を行う事にしたのだが――。

「・・・」

「睨むなよ」

「・・・」

「悪かったって言っているだろう？まさか僕だつてあんな事に成ると思つてなかったんだから仕方ないだろう」

ちよつとした実験の想定外の結果に実験に同行したティアは盛大に機嫌を損ね、さつきからジト目で僕を睨んできている。

「私、危うく死ぬ所だった」

「それは僕も同じだ。もう少し湖に近い位置で実験をしていたら本気で死んでたな」

「・・・」

「だから、悪かったって言ってるだろう」

何を隠そう今日はアマテラスによる光の剣精製実験を行ってきた所だった。仕組みは単純にアマテラスで光の塊を集めるだけ。無論、そのままでは高熱で近づく事も出来ない所以で距離を置いて精製した上で近所にある湖の水で熱を冷まそうという試みだった。

「僕だつてまさか爆発するとは思ってなかったよ」

「凄く吹き飛ばされた。耳もまだジンジンしているし」

結果だけを言えば集めた光の塊を水に接触させた時点で湖自体が大爆発を起こした。どうやらアマテラスの余りの熱量の為に水蒸気爆発を起こしたらしい。

「多少は予想していたけど、まさか湖が一瞬で蒸発するなんて」

「目が覚めた時、凄い人が集まつてた。どうするの、あれ？」

僕達はその爆発に巻き込まれ、吹き飛ばされて気絶している間に人が集まつてきていたらしい。幸いな事に周囲を確認してからの実

「験だったので死者は居ないようだが――。」

「犯人だとばれたら間違いなく死刑だな」

湖一つ干からびさせた罪は公の場に出れば大罪だ。

「さようなら。短い付き合いだったわ」

「待て。共犯者」

「私は共犯違う。巻き込まれただけだし」

「言っておくけど僕が捕まったらお前の名前を出して主犯だと自白するからな」

「・・・」

「・・・」

とりあえずお互いに牽制しあって睨みあった。

「それは兎も角、これ、どうするかな」

「これって、あれの事？」

ティアの視線の先には煌々と光る光の玉が浮かんでいる。何を隠そう今回の実験の成果であるアマテラスで集めた光の塊だ。ただし

「どうしても良いけど暑い」

「・・・煩い」

湖一つを犠牲にしたと言うのに殆ど熱量が冷める事がなかった。

お陰でかなり上空に固定していると言うのに昼間の様に暑くて眩しい。言ってみれば小型の太陽だ。

「捨てちゃえば？」

「面白い冗談だ。今これを開放したりしたらこの国が一瞬で蒸発する熱力と衝撃が発生するのを知っていて言っているならの話だが」

「・・・」

「時間を掛けて冷ますしかないな」

「・・・はあ」

自業自得だと分かっているても何故かティアの溜息が妙に癪に障った。明日のアマテラスの訓練は厳しい目にやってやろう。

光の玉を形成して一週間で過ぎたが未だに熱が冷めない。

「コンロいらずで便利と言えば便利だね」

「近づけ過ぎるなよ。鉄で出来ているフライパンでも接触すれば融解するぞ」

「熱い。もっと離して」

幸いな事に最初の時のように近づく事も出来ないほどの熱量ではなくなった物の未だに触れる事は出来そうに無い。

「あ。焦げちゃった」

「・・・それ、お前の分な」

「うう」

ちなみに現在地はティアに貸し与えた『自宅』だ。本来僕は寮に住んでいたのだが、この球体を持って帰る訳には行かなかったので（持って帰ったら熱は兎も角、眩しいと苦情が来た）仕方無しに自宅周辺から近くの森へ遠隔操作で隠す事でやり過ごす事になった。

そこから更に一週間。都合二週間が経過して――。

「これなら何とか水につけても大丈夫かな？」

そんな熱量までやつと冷めてくれた。

「本当に大丈夫？また爆発したりしない？」

「まだ十分に熱いが水蒸気爆発を起こすほどじゃない。今度は大丈夫だ」

心の中で『多分』とつけたのは内緒だ。

「それじゃ水につけてみるぞ」

「・・・うん。頑張つて」

「・・・」

ティアの声が遠い――と思ったらかなり遠くまで避難していた。気持ちにはわからないでも無いので僕も樽に汲んだ水を放置してティ

アの近くまで下がってから、その水に光の玉を沈める。

「うわぁ」

「爆発はしないけど水程度じゃ焼け石に水だな、これは」

計算どおり爆発はしなかったものの樽の中に入った水は一瞬で沸騰、蒸発して周囲に霧を作り出す。

「・・・暑い」

「サウナだな、こりゃ」

それでも幾度か繰り返す度に熱量は下がっていき、ついには蒸発する事無く樽の中でコポコポ泡を立て始めた。

「沸騰してるね」

「沸騰してるな」

瞬時に蒸発はしなかったものの熱量はまだ健在。お風呂としてはちよつと致命的に熱過ぎるお湯を沸かしていた。

「・・・ゆで卵でも作るか」

「うん。そだね」

それから更に半日ほど水につけてやっと手で持てるほどまで冷えてくれた。

「さてと。一応作っては見たけど、どうしようかね。これ」

手の中で弄ぶ光の塊。かなりの質量を圧縮してあるので僕の意味で操作していない今はそれなりの重さがある。

「あの人達の話では剣の形の整えるだけでもかなり大変だって言ってた」

「そうだろうな」

質量は確保出来た物の、剣とするなら剣の形を維持、更には切れ味を出す為に鋭い刃を形成しなくてはいけない。同時にこなすとなると思っていたより面倒そうだった。

「ううゝん」

頭の中で使い道を模索しながら光の玉を浮かせて僕の周囲を公転させる。重量があるといってもこれは僕が形成した光。光の法術師

である僕にとつてはある程度なら融通が利く。

「??」

そんな僕を見てティアも自身の光の玉を出すと周囲に浮かべようとして——ポロリと落とす。更に拾って浮かべようとして——ポロリと落とす。

「下手糞」

「どうしてえ〜?」

「光の玉その物じゃなくて周囲に満ちる光を利用して持ち上げるんだよ。質量があるとは言え光に変わり無いんだから光で支えるのが当然だろ?」

「・・・こう?」

ティアは恐る恐る手を離すと空中にボトつと音を立てて光の玉が落ちる。一応浮いてはいるのだが——エレガントじゃない。

「ふむ」

今気付いたがひょつとして僕はこの手の操作の方が得意なのかもしれない。光を明確な形に固定するよりも直感的なイメージを形にして操作するような、そんなやり方の方が僕には向いているらしい。考えてみればアマテラスにしてもレンズの形成は固定の形ではなく直感的な計算力を基にしたイメージを具現させている感じだったし。「と、すると・・・」

この光の玉で剣を作るような事は僕向きではないという事になる。どちらかと言うと直感的なイメージを反映させて——。

「わ」

僕のイメージを反映させ、幾つかの細長い短剣に分裂した光の玉を見てティアは声を上げた。僕はそれを更に周囲の光と兼ね合わせで方向を定め——解き放つ。

「きゃわ!」

ティアが奇妙な声を上げて無様に尻餅をつく。

「こ、殺す気?」

「周囲を回らせて居るだけで当てて無いだろ?」

僕のイメージに反映して形成された短剣達はティアの周りを取り囲んで回り始めていた。

「僕は剣を形成したりするより、こういう操作を事前に仕込んで走らせるほうが向いているらしい」

「そ、そんな事はどうでも良いから、これ止めてよお」

「刃のイメージが中途半端だから当たっても別に切れたりしないと思うけど」

「怖いの!」

「へいへい」

涙目のティアに睨まれた僕はティアの周囲を走らせていた短剣達を手元に戻して一つの光の玉へと戻した。

「それにしても・・・」

「?」

当初、まったく使えないと思っていた光系統の法術がこれほど有用だったとは意外だった。

法術は使い方次第。

確かに法術を勉強しているときはそう思っていたけれど、まさかそれが光系統の法術にまで適応されるとは思っていなかった。

今の僕にはアマテラスを初めとして自在に形を変えてプログラムとして走らせることが出来る光の塊まで存在する。

ひよっとしたら法術の中で群を抜いて攻撃力の高いといわれている火の法術師よりも高い攻撃力を確保しているのかもしれない。

否。アマテラスの攻撃力を考えれば圧倒的に僕のほうが上だろう。

「どうしたの?」

言葉と途中で止めてしまった僕を不審に思ったのかティアは困惑していた。

「いや。最初に光系統って判断されたときは絶望したけど、結構使えるんで感心していたところ」

「ふん」

ティアは興味なさそうにアマテラスの練習にもどった。

まあ、ティアにしてみれば現状自分の使える光法術に不満があるので僕の意見に同意しにくかったのだろう。

その考えを肯定するようにティアは自ら作り出したレンズに四苦八苦している。

「ひょっとして・・・」

「？」

今思いついたのだが――。

「お前にはアマテラスは向いてないのかもな」

「・・・何、それ？」

僕の言葉にティアがギロリと睨み付けて来る。

「別に嫌味で言っているわけじゃない。ただ僕が直感的なイメージを計算力として具現化させるのが得意なように、お前にも得意な分野が別にあるのかもなって」

「私の得意な分野って何？」

「僕が知る訳ないだろう」

「うう」

「唸ってもどうにもならないよ。お前の得意な事は自分で探しな」

「薄情者」

僕の言葉にティアは地団駄を踏んで悔しがるが、こればかりは僕が協力しても仕方がない。得意な事なんて僕にどうにかできる事じゃない。

なんて事を思った夜の事だった。

ふと。夜中に目が覚めた。特に虫の知らせがあつたわけじゃないが、なんとなく目が覚めて気まぐれで外に出てみた。

「？」

そこで、ほんの少しだけ何かが耳に届いた。

何か分からないほど小さな『何か』。でも無関心で居られない、その『何か』を求めて僕は歩き回った。

それを見つけるのにさして時間は掛からなかった。

「るるるるるるるるるるるる」

月の光を舞台に歌う月の女神が居た。

彼女の周りをユラユラと光の衣が風に舞い踊る。

純粹に綺麗だと思った。

その彼女が不意に僕の視線に気付いたのか振り返った。目が合った。

「何？」

そしてぞんざいな口調で問いかけてくる。だから僕は彼女に向かつて――。

「音痴」

「！」

ティアに向かって正直な感想を告げてやった。確かに幻想的な姿ではあったが歌は下手だったし。

「そ、そんなことを言いにわざわざ夜中に起きてきたの？」

「そんなわけあるか。ただ目が覚めたから散歩しに着ただけ」

「うう」

ティアはいつもどおり不満そうな顔を僕に向けてくるが、そんなことより気になることがあった。

「それ。どうしたんだ？」

「え？これ？」

僕が指し示した彼女の纏っていた光の衣を彼女はふわりと持ち上げて見せる。

「寒かったから」

「ふん」

確かに昼間に集めた光がほのかに暖かいので暖を取ることも可能だろうが僕が着目したのはそこではなかった。

「他の形にも出来るのか？」

「他って？」

「例えば・・・そうだな。動物の形になんて出来るか？」
「こつ？」

僕の要求にティアはあっさりと光を動物——猫の形に象って見せた。

「動かせるか？」

「え？うん。たぶん」

いつもながら頼りない返事ながらも有言を実行させて光の猫をトコトコ歩かせるティア。なるほどね。

「それ。他の光の法師達と一緒にいるときは見せなかったのか？」

「なんでそんなこと聞くの？」

ティアは自分のやっていることの意味が分かっていないようだった。

「光を形成して特定の形に象ることなら僕にも出来る。けど形成した光を服のようににはためかせたり動物そっくりに動かしたりは出来ない」

「なんで？」

「逆に聞くんが、何でそんなことが出来る？」

「・・・」

「僕が出来ないことが変なのではなくて、お前が出来ることが異常なんだよ」

「む」

異常呼ばわりされてティアは眉をひそめるが、これは思った以上に発見かもしれない。

「それ。結構有効かもな」

「それって、この動かすの？」

ティアは未だに維持したままの光の猫をさらにトコトコ歩かせる。本当、どうやっているのやら。

「こんなの何の役に立つの？」

「今は役に立たないが光が物質化出来るほど集まればかなりのこと

が出来そうだ」

「そ、そう？」

「ああ。攻撃力は僕のアマテラスには全く及ばないが、物質化した光を纏えるなら相当な防御力を確保出来るだろうし、獰猛な動物として物質化させれば並みの人間では太刀打ち出来ないだろう」

「いつてみれば攻守ともに揃った万能型といったところか。」

「へえ」

「淡白な返事とは裏腹にティアは嬉しそうだ。現金な奴。」

「ね。ね。これ、どうしょっか？」

「どうって？」

「な、名前とか付けたほうが良くない？アマテラスみたいに」

「つければ良いじゃん」

「うん」

「僕の淡白な返事にうなるティア。相変わらず面倒くさい女だ。」

「わかったよ。名前考えればいいんだろっ」

「うん」

「仕方ないので少しでも考えてやった。」

「『ツクヨミ』。でどうだ？」

「ツクヨミ？」

「アマテラスが太陽の神だとするとツクヨミは月の神だったかな？そんな感じだ」

「へえ」

「やっぱり淡白な返事とは裏腹にティアは嬉しそうだった。単純な女。」

第四章（後書き）

やっと第四章完成です。

でも完成して直ぐ載せたのは色々誤字脱字あるかもと不安です。

第五章

ティアの使うツクヨミ。

その光の衣形態をアルテミス。獣の形態をフェンリルと名づけることにした。

無論、ティアの要望であることは言うまでもない。

「熱っ！」

今日何度目かの悲鳴をティアが漏らす。

「だから、ちゃんと定期的に確かめないと火傷すると何度も言ったのに」

「うう」

ティアの分野であるツクヨミを実行するためには最低限、光を物質化させないといけないので仕方なく僕がアマテラスの弱体版で光を集めて、それをティアが光の塊に吸収するという作業を行っていた。

ちなみに弱体版のアマテラスは通常の数万分の1程度の集光率だ。それでも数分も照射し続ければ火傷するくらいは熱くなる。その為、数分に一度は桶に汲んだ水で冷やそうという試みだったのだが――

――相手がティアだということを失念していた。

「本当、お前ってお約束だよな」

「むう」

頬を膨らませて拗ねるティアだが、もうこの作業を2週間近く続けているのに同じミスを何度も繰り返しでは呆れもするというものだ。

「それより計算ではそろそろ物質化するはずだが、まだなのか？」

「ん」

ティアは自分の光の塊をコンコン叩いているが今一つ満足な顔を
していない。

「多分、もうちょっと？」

「なんで疑問系なんだよ」

「だって、わかんない」

「はあ」

本当、どうすればいいのだろうね。この娘。

ティアの光の塊が完成を見たのは更に1週間も作業を続けてから
だった。

「で？どんな感じだ？」

「えっと」

ティアは完成した光の塊を持って目を瞑って——持っていた光の
塊を餅のように伸ばした。

それをスルスルと編みこむように象り、あの時見た光の衣を作り
上げていた。

「ど、どう？」

「前見たときは悪くないと思ったけど、派手すぎる」

「・・・」

月の光の下では映えた光の衣も太陽の下では派手な服だった。

「もうちょい何とかならんのか？」

「そんなこと言われても」

まあ材質が光だしな。地味目の服を編み上げるといっても無理な
話だ。

「もう一つの方は？」

「やってみる」

ティアは纏っていた光の衣を一度塊に戻してから動物形態——フ
エンリルを作り上げる。フエンリルの由来を話してやったからなの
か、その姿は狼だった。

「ど、どうかな？」

「どうって。動かしてみれば」

「う、うん」

ティアは恐る恐るといった感じでフェンリルを――トコトコ歩かせた。

「迫力ねえ」

「うう。だって何すれば良いかわかんないんだもん」

「とりあえず走らせろ」

「う、うん」

僕の言葉に従い、ティアはフェンリルを走らせる。擬音にするとタツタカ、タツタカ。

「猫かよ」

「うう」

どうやらツクヨミにはまだまだ研究の必要がありそうだった。

「ふわあ」

久しぶりに暇な昼下がり。

ティアはアルテミスの形態とフェンリルの動き方を研究するために図書館へ行かせてあるので今は僕一人だ。

相変わらず僕のランプ屋はそこそこ繁盛していた。

余談だが前に難癖つけてきたランプ屋は他所へ引っ越したらしい。ご愁傷様。

そんな暇な僕の元へ――。

「失礼。貴方は光の法師様ですか？」

身なりのきつちりした初老の男が尋ねてきた。

「えっと。何か？」

明らかに客ではない身なりと物腰に正直、嫌な予感がした。

「私はエステラクルム国の臣下をしている者です。失礼だがルドラ殿はどちらへ？」

「ルドラ？」

エステラクルムという国にも聞き覚えはなかったがルドラという名前にも聞き覚えはなかった。

「光の法術師の長。ルドラⅡゼラムⅡルルクラム殿です」

「・・・」

なんとなくだが、あのティアを庇って自爆した光の法術師の老人の姿を連想した。ひょっとしてあの連中の関係者か？

「約束の日時が迫っています。一刻も早くルドラ殿への面会をお願いしたのですが」

さて。どうやって惚けようかとも思うが――。

「・・・」

僕の足元においてある光を入れたランプを見て嘆息した。誤魔化すのは無理くさい。

「僕は、そのルドラって人の仲間じゃないですよ。その人なら多分・

・死にました」

「なんですと？」

初老の男は目を見開いてから僕を鋭く見つめてくる。

「失礼ですが少しお話を伺ってもよろしいですか？」

「はあ」

やっぱり、こうなったか。

「私はエルクラム。エルクラムⅡドⅡダルサクスと申します」

話をする為に移動した喫茶店で初老の男はそう名乗った。

「僕はアルフレッドです。アルフレッドⅡディアⅡヴァルハリア。

知り合いにはアルって呼ばれています」

「ではアル殿。率直に申し上げて貴方は何者ですか？」

「・・・」

率直過ぎる。

「普通の光の法術師ですが」

「だが貴方は先ほどルドラ殿の死を言葉にした。少なくとも貴方は

ルドラ殿と面識があったことになる。なのに貴方はルドラ殿の仲間ではないという。これはどういうことでしょうか？」

「単純に僕の連想したルドラって人と貴方の知るルドラが同一人物かもしれないってだけです。多分といったでしょう？」

「ふむ。では貴方の知るルドラ殿はどういった人物でしたかな？」

「老人。7人の光の法術師の中にいた老人が長って感じだったから」
「・・・私の認識と同じですな」

「じゃ多分そうなんだろう」

僕の言葉にエルクラムは目を細める。嫌な展開。

「ルドラ殿の使命をご存知か？」

「いや。ただ光の法術師を集めているみたいだった」

「それは手段であり目的とは異なります。ルドラ殿には我が国より重大な仕事を依頼してあったのです。光の法術師にしか出来ない重大な仕事を」

「へえ」

だからあんなに強引だったのか。

「内容に関しては国家機密に抵触する為お話出来ませんが、とても重要なことです」

「・・・」

「その仕事を放り出してルドラ殿がやすやすと殉職されるとは考えにくいのです。何があったか詳細をお聞かせ願えませんか？」

「嫌」

きつぱりはつきり断った。話して僕に良い事がありそうにないから。

しかし――。

「エルクラム様。ティア殿をお連れしました」

「・・・」

状況は僕の有利には進みそうもなかった。

「なんとということだ」

僕を援護する気もないのか恩知らずなティアはエルクラムに洗わざらい知っていることを話してしまった。但し、僕の視線に怯んだのかアマテラスの事は少しばかり話してくれた。

「では本当にルドラ殿は殉職され、残っている光の法術師は君たち二人しかないということなのか？」

意外なことに僕が光の法術師たちを全滅させたことには苦言はなかった。

「十分だと思いますけどね。二人『も』いれば」

「足りないのだ。最低でも光の法術師が10人居なければ使命を果たすことは出来ない」

「10人って」

僕の知る限り、あの時居たのは7人＋僕1人。計8人しか居ない。どんな使命なのか知らないが彼の目的は最初から破綻していることになる。

「ともかく自体は一刻を争う。我々とともに我が国へ来てもらいたい」

「嫌」

「・・・」

「仕事があるし、なんか厄介ごとそうだから嫌」

「ふう」

エルクラムは一つ溜息をついてティアをつれてきた部下らしき男に目配せする。なんだか猛烈に嫌な予感。

「アルフレッド」ティア「ヴァルハリア。君が育ったのは辺境の孤児院だそうだね」

「・・・」

「君はそこに居る同期の女性であるヴァルハリア嬢に仕送りをしているようだね。我々はその孤児院に寄付をすることも出来るのだよ？」

「ち」

寄付などという名目を語ってはいるが、これは立派な脅迫だ。僕

が言うことを聞かないなら姉さんがどうなってもいいのかという脅迫。

「良いよ。どうせこんな展開になる気はしていた。さっさと連れて行けよ」

「ご理解があつて喜ばしい限りですな」

「姉さんに指一本でも触れたならお前らの国ごと消し飛ばすけどな」
「ほっほっほ」

エルクラムは笑っていたが僕が冗談で言っているわけではないことを知っているティアは真っ青になっていた。

「ねえ」

道中。名前も覚えていない国へ向かっている最中、ティアが僕の裾を引っ張って話しかけてきた。

「あなた、お姉さんが居たんじゃなかったの？」

「居るよ」

「だって、さつき孤児院の出身だって」

「孤児院の連中なんて皆が皆兄弟みたいなものだ。同期の中でも年上なら姉さんって呼ぶのさ」

「・・・」

ティアはなんだか複雑そうな顔をしている。自分だって大していい境遇ってわけでもないのに僕に同情するな。

大層なことをいつていたわりに馬車の一つも用意してくれなかった。エステラクルムという国に到着するまで2週間近くも時間を消費することになった。

「疲れた」

「色々言いたいことがあるが今回に関しては同感だ。貧乏国になんて招待されるものじゃないな」

「ほっほっほ」

僕の嫌味に対してもエルクラムは涼しい顔だ。面の皮の厚いやつ。
「では早速国王への謁見を執り行いましょう。お二方共、こちらへ」
そして付いて早々休む間もなく僕たちは引きずられるようにして謁見の前へと連れて行かれた。

「なるほど」

事情を聞いた国王の第一声がそれだった。

「10人の予定が5分の1まで減ってしまったのは遺憾ではあるが彼らを責めても事態は進展しない。今優先すべきは使命の成就だ」
「さようございます」

いまだに使命とやらが何なのか知らされていない僕たちにはどうも共感しにくい。

「しかし見たところ二人はまだ若輩の様子。悪いが、その力を溜めさせて貰うぞ。エルクラム！」

「御意に」

そして僕とティアは炎に包まれた。

今までそんなそぶりを全く見せなかったがエルクラムは火の法術師だったようだ。四大系統の内に最強の攻撃力を誇る炎の法術をまともに浴びせられて僕たちは――。

「ふむ。ヤタ程度は使えるようだな」

双方ともに無傷だった。

僕は光の塊を前面に複雑に展開して盾を作り出していたしティアは――。

「ほお。柔軟な使い方だ」

正直、展開が間に合うかどうかいまひとつ疑問だったのだがティアは既に光の衣であるアルテミスを体に纏っていた。というか焦げた服が床に落ちているのだが――。

「お前、まさか・・・」

「ど、どうしよう」

どうやらティアは咄嗟にアルテミスを展開したのではなくはじめから服の下に纏っていたらしい。確かに塊にして懐に入れておくよりも持ち運びは便利なのだろうが——無意味に器用な奴。

「しかし防御だけで君たちを認めるわけにはいかない。エルクラム」
「はい」

そして先ほどもより強力な炎を身に纏い僕たちと対峙するエルクラム。どうしようか一瞬迷ったのだが——折角なのでティアに任せることにした。

「わ、私？」

「折角用意してくれた実践の場だ。試してみろよ」

「う、うん。でも・・・」

ティアは不安そうに光の衣を指でつまみ上げる。

「あゝ。そういうことか」

どうも乗り気じゃないと思ったらティアの光の衣の下は裸なんだ。まさか下着まで燃やされたわけではないだろうが限りなく素肌をさらしてしまうことには違いない。

「ほら」

仕方ないので僕が纏っていた煤けた外套をティアに差し出す。

「あ、ありがとう」

受け取ったティアは光の衣の上から身に纏い、外套の下からよろつと光の帯が顔をだす。そして光の帯はティアの隣に鎮座して——狼にその姿を変えた。

「行け。フェンリル」

そしてティアの命令を受けて光の狼はエルクラムに突進した。図書館で少しは参考になる資料を見つけていたのか以前のような頼りない猫のような走り方ではなく肉食獣のごとき獰猛な走り方でエルクラムに襲い掛かる。

「ほっほっほ。面白い使い方ですが正面から来られても恰好の的ですぞ」

対してエルクラムは余裕の表情で光の狼に対して特大の炎の塊を

直撃させた。

「終わりですか？」

「あんだ、馬鹿じゃないのか？」

「ほ？」

爆炎の中から現れたのは炎を纏った光の狼だった。

「炎って言うのは光に性質が一番近い。炎により発生する光は勿論、熱もな。吸収するのは赤子の手をひねるより容易い」

「く！」

エルクラムの炎を吸収した光の狼は既にフェンリルというより地獄の番犬だ。

「フェンリル炎形態・ケルベロスとでも名付けるかな」

「こう？」

さすがにケルベロスの名前くらいは知っていたのかティアは僕のリクエストに応じて炎の狼の首を3つに増やした。本当、無駄な所で器用な奴。

「ま、参りましたな、これは」

自慢の炎を無力化させられたせいか、エルクラムは冷や汗を流して国王に伺うような視線を送っている。

「うむ。彼女に関しては問題ないだろう。問題は……」

当然のように僕に視線が突き刺さる。面倒くさいな。

「高みの見物で合格点をやれるほど私は寛容ではないぞ、少年」

そんな僕に対してエルクラムの部下が僕に背後から姿を現した。

エルクラムと同様に彼も法術師だったらしい。しかも水系統の法術師。

「行きますぞ」

そして迷惑な事に僕へ向かって水の槍を無数に投げつけてきた。

「……」

僕はそれを先ほどと同じように光の塊を複雑に展開する事で盾として防御する。

「ヤタは確かに強力な盾ですが万能という訳ではありませんぞ！」

水の法術師は何処に隠し持っていたのかというほどの大量の水を凝縮した強力な水圧を僕の光の盾にぶつけてくる。

水の法術師の言葉どおり僕の展開していた盾——先ほどから僕の展開する盾に関してヤタを命名されているようだが恐らく三種の神器のうちの一つ、八咫鏡をイメージして付けられているのだろうが——がバラバラに弾け飛ぶ。

「我が三つ矛に貫けぬ物などありませぬぞ」

だが、それは勘違いだ。

「な!？」

気付いた時にはもう遅い。

バラバラに弾け飛んだ光の盾は水の法術師の周囲にばら撒かれ——

光の剣として彼の周囲を徹底的に包囲した。

元より僕が前面に展開していたのは盾ではなく、光の剣を複雑に絡み合わせて変形させた無数の剣の集合体だったのだから。

「ほほおゝ。ヤタではなくムラクモだったのか。面白い。実に面白い使い方だ」

無数の光の剣に包囲されて冷や汗をダラダラ流し続ける水の法術師とは違い国王はいたって呑気な感想を述べていた。

第六章

「ではアルフレッド・ディア・ヴァルハリア、並びにティア・アムズ・マルレシアに使命を与えよう」

別に欲しくもなかったのだが試験の合格してしまった僕とティアはエステラム王国より使命を託される事になってしまった。無論、強制的に。

「先ず先に確認するが汝らが及ぶ知識にあるのは五つの系統の法術だな？」

「ええ。まあ」

先に述べたとおり法術には火、水、土、風の4系統に光を合わせたら系統が存在する。ある意味常識だ。

「汝らの使命は第六系統の抹殺だ」

「は？」

「存在してしまったのだ。望まれぬ第六の系統が。そして彼らは最悪の形で我々に宣戦を布告してきた。無論、我らも黙って侵略を許すつもりはなかった。だが彼らは圧倒的だったのだ」

「・・・」

「正確に言えば第六系統達には攻撃が全く通じないのだ。既に多くの法術師を刺客として派遣しているが成果を挙げることが出来たのはごく一部だ。そう光の法術師であるルドラ殿だけが」

「・・・」

何となく話が見えてきた。

「彼らへと唯一の対抗手段が光の法術師であり、彼らの使うムラクモ、ヤタ、ヤサカだけが第六の系統に通用する唯一の攻撃手段だった」

「つまり僕らだけで、その第六の系統の法術師達を何とかしろ？」
「そういうことになる」

「・・・」

正直な話、ふざけるなという心境だった。何の恩もないこいつらの為に僕が体を張る理由が思い浮かばない。

が。姉さんが人質に取られているも同然の状況では迂闊な発言も出来ない。

「一つ聞きたいんだけど第六の系統って何なの？」

「闇の法術師達だ」

「面倒な事になったな」

「そだね」

結局、僕らはいくらかの情報と準備を経て闇の法術師達の討伐に向かう事になった。

一つ救いがあるとすれば、それは闇の法術師達の総数が10人に満たないという事だった。

エルクラムが10人以上の光の法術師を必要としたのは相手が10人程度ならこちらも10人必要だろうと言う単純な計算かららしい。

ちなみに闇の系統の攻撃手段というのは影の物質化らしい。

正確に言うと彼らは影を半物質化させて攻撃手段をつくりあげるらしい。完全な物質化ではない為か4台系統のどれとも相性が悪くダメージらしいダメージを与えられないし攻撃を防ぐ事も出来ないらしい。

そんな闇の法術を唯一防ぎ、打倒したのが光の法術師の長であったルドラなのだそうだ。

闇だから光が有効、という単純な結論ではなく影に光を浴びせることによって強制的に半物質化している影を物質化させて攻撃と防御を有効にするということらしい。

相手をパワーアップさせてから戦わなくてはいけないとは何とも

面倒な戦い方だった。

「しかし、お供も無しで僕達が逃げたらどうするんだろ？」

「信頼されている、とか？」

「期待されていないだけだろ」

「うう」

多分、奴らからすれば相手を一人でも削れば儲け物、くらいの気持ちで僕らを送り出したのだろうし。もっとも逃げられないようにしっかり保険を掛けているところがいやらしい。

「それで、どうするの？」

「情報によれば奴らの拠点はある程度絞り込んでいるらしい。そこを制圧してくれば文句もないだろう」

「そう」

ティアはいつも通り淡白に頷いて僕の後とトロトロとついてきた。マイペースな奴。

「ふむ」

拠点を絞り込んでいるといっても地図上の話であって搜索範囲は広い。地道に足で探そうと思っていたが面倒になってきた。

「アマテラスで周囲一体を焼け野原にでもするかな」

「それは遠慮してください」

「・・・」

勿論、僕に対して馬鹿丁寧な対応をしたのはティアじゃない。振り返るといつの間にか黒い法衣を顔まですっぽりと被った女が背後に立っていた。

「確認するけど・・・」

「はい。なんでしょう？」

「あんたが闇の法術師さん？」

「はい。その通りです。アルフレッド＝ディア＝ヴァルハリアさん」
「・・・」

どうでも良いけど、どうして僕の個人情報駄々漏れなんだ？

「立ち話もなんですし私達の拠点へご案内しますよ」

「・・・それはどうも」

なんだかまた妙な展開になってきた。なんなの、この親切な対応。

彼女に連れられてきたのは細長い通路から地下へ降りる階段だった。なるほど、確かに拠点っぽい。

「少し複雑な造りになっていますので迷わないで付いて来て下さいね」

「へいへい」

彼女に案内されるまま僕は後ろをついていく。

勿論、無用心についていく訳ではなく曲がり角や分かれ道などには光のマーカーを残して進む。

「案外、用心深いんですね」

「性格でして」

「頼もしいですわ」

「・・・」

そんな意味のない会話をしつつも僕はところどころに光のマーカーを残しながら彼女の後を付いていく。最初の言葉どおり複雑な迷路みたいな所だ。

「今更だけど僕らの目的ってわかっているわけ？」

「ええ。私達の討伐ですよ」

「それをわかっていて僕をわざわざ案内している訳？」

「直ぐにわかります」

「・・・」

なんだか彼女と話していると調子が狂う。

後ろについてきているティアはと確認すると彼女も僕と同じなか前を進む黒い法衣の女性をぼくと眺めながら歩いていた。

「着きましたわ」

そして数十分の案内の元、辿り着いたのは祭壇のような場所だった。

「怪しい場所だな」

「その昔、悪魔信仰者が儀式を執り行つた場所らしいですね」

「へえ」

「ようこそ。同士諸君」

そして関心なのか呆れなのか自分でもわからない返事をする僕へ声は掛けられていた。

「歓迎するよ。光の法術師達」

端正な顔つきの黒い服を纏った男と案内役の女性と同じように顔を隠した7人の闇の法術師が笑顔で僕達を出迎えていた。

「初めに自己紹介をさせてもらおう。私はディシプリィロイィアーティレム。呼びにくければロイで良い」

「僕は・・・」

「存じているよ。アルフレッドィディアィヴァルハリア君」

「・・・」

本当、個人情報漏れまくり。
「君の話は聞いているよ。何でも世界を滅ぼす光を持っているとかね。アマテラスとかいったかな？」

「・・・」

「君の発想力には本当に驚かされているんだ。無力と言われた光系統の法術をここまで使いこなせる君にね」

「僕の使命をご存知ですか？」

「勿論。私達を討伐に来たのだろう？」

「その割には呑気ですね。僕をこんなところまで引き込んで」

「話は聞いていたからね」

ロイは肩を竦めて首を振る。
「君と話し合いの席を設けたくてこんな辺鄙な場所まで用意する羽目になってしまったよ。ああ、言い忘れたがここは我々の正規の拠点じゃないんだ」

「・・・」

「何故、こんな場所を用意したかは君ならわかるだろう？ アマテラスを使って欲しくないからだよ。ここが地下空間ということもあるが、崩れやすくて入り口から複雑に絡み合っているからね。例えば真上から直接照射したとしても我々と共に生き埋めになるのが関の山だ。君はそんなに愚かではないだろう？」

「はあ。やっぱりか」

僕はある意味納得して肩を竦めた。

「理解が早くて助かるよ」

ロイは笑顔で僕に笑いかけるが――。

「違う。僕が納得したのは、この辺鄙な場所の話じゃない」

「どういう意味かな？」

「あんだと、そっちの案内役の女と、そこに並んだ7人。計9人だ。僕が事前に聞いていた闇の法師の総数は10人。あと一人は誰なんだろうな」

「・・・」

「まあ、最初から信用していた訳じゃないし、最初からそっちに属していたんなら裏切りって訳でもないんだろう。理由も想像がつくしな」

「！」

僕が光の塊から小さな短剣を作り出して投げつけると『彼女』は咄嗟に身構えたが顔を覆う布切れが床に落ちただけで特に血を流したりはしなかった。

「改めましてか？ マルレレシア嬢」

「・・・」

僕達の案内役として顔を隠していた彼女の素顔は――ティアに瓜二つだった。

「いつ、気付いたの？」

そして10人目の闇の法師・ティア・アズム・マルレレシアは僕の傍から彼女――恐らくティアの姉と思われる女性の隣へと移る。

「実を言うつといさつきだ。お前が彼女に羨望の視線を向けているんで気になっていたし、その男が僕のアマテラスの情報を得るにはお前を介入するしかないだろう?」

「別に全部が演技って訳じゃない」

「だろうな」

ティアにそんな器用な事が出来るとは思えないし僕に対応していた時の反応は完全に素だった。

ティアが闇の法術師の集団に参加した理由も何となく想像がつく。恐らく瓜二つの顔を持つ姉に誘いを受け、ほいほい着いていったのだろう。僕の姉さんを妙に羨ましがっていたのも納得がいく。もつとも、恐らくスパイ行為の為なのだろうが光の法術師達に傘下に加わっていたのは役者不足だと思うが。まあ、その癖しっかり一人だけ生き残っているのだから案外予定通りなのか?

「それで、どうするかね?」

僕が納得したのを確認してかロイがたずねてくる。

「どうとは?」

「聡明な君の事だ、見当はついているのではないかな?」

「闇の法術師の正体が光の法術の一部だって事を、か?」

「流石だね」

別に今更驚く事じゃないし影を操ると聞いていた時点で連想はしていた。影を作るのは光の役目だろう。

「そう。私達は元は光の法術師なんだよ。いや系統で言えば今も光の法術師だけだね」

「だから僕に仲間になれって?」

「そういうこと」

僕は肩を竦めて嘆息する。ティアの正体に関しては確かに少し予想外だったが僕のやる事に変更はない。

「断る」

「・・・何故?」

「光の法術師ってことはアマテラスを使える可能性があるから。自

分のドジなら兎も角、他人のドジで世界を滅ぼされるのは御免だ」

「それに関しては心配ない。アマテラスを使いこなせるのは世界中に君一人だからね」

「？」

「自覚はないかもしれないがアマテラスは君が想像している以上に難物なんだよ。ここに居る全員が挑戦してみたが照射どころか集束すら上手く行かない。それ以前に自爆の危険性がある術を早々試せる勇気のある者も居ないしね」

「ふーん」

「納得してくれたかな？アマテラスは君の固有技だという事を。そして私はアマテラスよりもティアの才能を引き出した君の手腕に期待しているのだよ。ティアは君も知っての通りあまり優れた法術師ではなかったからね。それをツクヨミだったか？君の助力を得た彼女は一流の法術師になったといっている」

話を聞き流していたティアははにかんで照れている。別にお前は褒められてないぞ。

「どうか私達に力を貸してくれないかな？」

「断る」

ロイの哀願に似た声に、しかし僕はキツパリと断った。

「何故？」

「お前達をしている事が世間一般に犯罪者として扱われているからだ」

「それが？」

「あんたらの仲間になったら姉さんに顔向け出来ない。だから僕はあんた達に仲間にはならないし力も貸さないよ」

僕の堂々としたシスコン発言に、しかし笑いを漏らす者は居らず鋭い視線が突き刺さってくる。

「君はもう少し頭も良い子だと思っていたのだけだな」

「そいつはどうも」

「わかっているのかな？ここで誘いを断るという事は敵地のど真ん

中に飛び込むという事なのだよ？」

「僕は最初からそのつもりだったけど？」

「アマテラスも使えない状態でかい？」

「使えないなんて言った憶えはないよ」

「！」

真っ先に反応したのは皮肉な事にティアだった。僕の言葉に何かしらの脅威を感じたのか自分と姉、そしてロイをツクヨミで覆い隠した。

良い判断じゃないか。

「ぎゃぷっ！」

ツクヨミに護られた3人を除いた7人が意味不明な言葉を残してこの世から蒸発する。勿論、僕のアマテラスの照射によってだ。

「ば、馬鹿な。この場所でアマテラスが使えるわけが・・・」

「別に真上から照射しなくても入り口からここまで通せば良いだけだ。多少距離があるうと文字通り光速で攻撃出来るんだから」

「あ、ありえない！入り口からここまで迷路のように複雑に入り組んでいるんだぞ？それを正確に通すなんて出来るわけが・・・」

「あ」

ロイの言葉を遮って声を上げたのは名前も知らないティアの姉だった。

「まさか、あの光」

「ご名答。入り口から分岐路の度に残してきた光は目印を兼用としたアマテラス専用の屈折マーカーなのさ。それを通せばどんなに入り組んでいようとアマテラスを正確に照射できる」

「ま、まさか、ここまでとは」

ロイが苦渋を飲んでいる。まあ、正直ティアの裏切りと咄嗟の判断力は想定外だったのだが許容内だ。いくらツクヨミでも何度もアマテラスを防げはしない。

「チェック・メイトだ」

だから僕は勝利を宣誓した。

けれど――。

「確かに君は私の想像を超える人材だったが勝利宣言は少しばかり早いんじゃないかな？」

僕の宣誓は覆される。

「伊達に私とて闇の法術師の長を名乗っている訳ではないのだよ」

「！」

ロイの手に光の球体が現れ、それが一気に凝縮されていく。

「ロイ！それは！？」

「黙っていなさい。もはや、これ以外に彼を打ちのめす手段はない」
不吉な二人の言動を具現化するようにロイの手に握られた光は極限まで凝縮されて真つ黒な闇を吐き出し始めた。

「あ、ああ」

変化は直ぐに訪れる。

僕とティアとティアの姉の下から光の塊がすり抜けるように引きずられていく。僕とティアは呆然と、ティアの姉は絶望的な顔でそれを眺め――3つの球体をロイの掌に浮かぶ黒い球体へと吸い込まれていった。

黒い球体――否、黒い穴だ。

「ブラックホール」

「その通り。こいつは法術に限定するが、どんな法術でも吸い込んでしまう性質を持つ闇系統の最終奥義。そうだな、君のセンスに便乗してスサノオとでも名づける事にしよう」

「・・・」

無言で僕はアマテラスを照射する。が、光の速度を持つアマテラスを持ってしてもロイの持つ黒い穴の超重力には逆らえないのかやすやすと吸い込まれていってしまう。

「無駄だよ。これを出したからにはいかなる法術であろうとも私を傷つけることは不可能だ。このスサノオは事、法術師に関しては無敵の一つと言っても過言じゃない」

「ち」

あまり歓迎しない展開に僕は思わず舌打ちを漏らす。とんだ切り札があつたものだ。

「これが最後の忠告だ。同士になり給え、アルフレッド」ディア「ヴァルハリア！」

「・・・断る」

勿論、即答。

そして僕は法術師殺しの最終兵器を携えるディシプリ「ロイ」アイティレムに対して『僕の切り札』を展開した。

「は？」

それを見たロイの間拔けな声と同時に――腕に装着していた『簡易式ボウガン』を発射した。

「ぐふ」

その矢はまともにロイの腹に突き刺さり、ロイは信じられない物を見たような顔で――ドサリと倒れた。

「拘りすぎなんだよ」

確かにスサノオは脅威といえは脅威だが、あくまで吸い込めるのは『法術のみ』。物理的な攻撃に対しては何の防備にもなりえない。そもそも物理的な現象まで干渉出来るなら、そもそも術者自身が耐え切れない。

それ故に僕が腕に装備してきた簡易式ボウガンはロイにとってまさに『予想外の代物』だっただろう。

エピソード

「ねえ」

全てが終わった後、ティアが僕に尋ねてきた。

「私達は良いの？」

「殺して欲しいなら今すぐ蒸発させてやるぞ」

「・・・嫌」

僕とティアのやり取りにティアの姉——エミリア「アズム」マルレシアは呆れたような視線を向けてくる。別に漫才のつもりはな
いんだが。

「あゝあ。やっと私にも出番が回ってきたと思ったのになあゝ」

「出番？」

「うん。世界征服を企む闇の軍団。ちょっと恰好良いと思わない？」

「・・・」

ティアにしてこの姉ありか。最初見たときはクールな姉かと思っ
たが所詮はティアの姉という事か。

「それで。これからどうするつもりだ？」

「どうしよつか？ティア」

「わかんない」

「そうだね。わかんないね」

「・・・」

本気でそっくりだな！

何か今、問答無用でアマテラスで蒸発させてやりたいくらいイラ
つときた。

「あ。そだ」

「言っておくけど僕は嫌だからな」

「あ。そうね」

「嫌だっって言っているだろう！」

「それじゃ・・・」

「これから姉妹共々・・・」

『よろしくおねがいします』

「嫌だつて言つてんだろ！聞けよ人の話！」

結局の所、色々面倒なことが起こつたというだけで僕の現状は大して変わっていないような気がする。否、ティアの姉——エミリアが加わつた事でひよつとすると僕の苦勞は倍になるんじゃないか？僕は嘆息しながらニコニコしている姉妹を見て、どうかエミリアがティアより少しは役に立ちますようにと信じてもない神に祈りを捧げてみた。

勿論、約束どおりエミリアはティアと同等——否、それ以上に役立たずなのだつた。

エピソード（後書き）

色々あって間が開いてしまいましたが最後は一気に投稿してみました。

自分としても第四章、第五章あたりはまだ納得が行っていないのですが最後は及第点かな、と思って投稿する事にしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7803h/>

太陽の女神と月の雫

2010年10月8日14時48分発行